

## 静かな革新、確かな継承

| 池田 学 Manabu Ikeda

このたび、2年ぶりに副理事長を拝命いたしました。よろしくお願ひいたします。

前回、当時の理事長であった久住一郎先生から私に与えられた最も重要な仕事は、本学会の専門医テキストの編集作業でした。つい先日出版された本学会初の専門医テキストのめざすところは、専門医を志す専攻医の研修中に学ぶべき内容だけでなく、生涯教育やサブスペシャリティ選択に対応する内容を盛り込むことでした。精神科専門医試験問題は、このテキストから出題されることが決まっているため、最新の診断基準や標準的な治療法は網羅されていますが、ガイドラインにあるようなこれらの例挙ではなく、病態や概念の変遷、現在の疾病概念や診断基準の限界、最新のバイオマーカー、今後の解決すべきクリニカルクエーションなど、各執筆者の思いが詰まった内容となっています。専攻医の先生方のみならず、専門医の先生方にも臨床や研究のプラッシュアップにぜひ活用していただければ幸いです。

本書のもう1つの特徴は、次の世代に本書のコンセプトや編集理念を伝え、さらには最新の知識を反映させるために、編集作業の途中から若手の先生方に編集委員に加わっていただいた点かと思います。本書の改訂はおそらく5年以内に開始されると思われますが、次回の編集作業では中心的な役割を担ってくださるはずです。

本学会のような会員数が2万人を超えるような組織では、このような事業の継続性と未来のリーダーの育成の両立がきわめて重要と考えます。三村将前理事長から村井俊哉理事長に引き継がれている各種委員会活動の見直しや、委員会メンバーの新旧交代は、特に次世代の育成には欠かせないと思います。一方、本学会にはかつての理事経験者などの大先輩が、監事としてこれまでの豊富な経験をもと

に、理事会が過去の事例を参考にしたいときや対応に苦慮するときに、軌道修正や助言を与えられるシステムがあります。このような仕組みは、組織の継承や事業の継続性、理事会の成長には不可欠なシステムであると思います。

個人的なことになり恐縮ですが、退官が近くなってきたここ数年は、組織の継続性と次世代へのバトンタッチの両立を考える機会が増えてきたのと同時に、退官後の自分の役割についても考えるようになりました。私の専門領域は老年精神医学ですので、定年退職や子どもの独立といった初老期のライフイベントは日々の臨床でも重要なテーマであり、臨床研究のテーマとしても興味をもち続けています。しかし、自分がいざ当事者になりつつあると、退官後の準備や生活設計は心許ないかぎりです。藤沢周平作品のなかでも江戸時代の市井の人々の生活を淡々と描いた『三屋清左衛門残日録』は、私の愛読書の1つです。予定通り家督を息子に譲り、藩の重役を退いた清左衛門は悠々自適の隠居生活をのぞんでいましたが、隠居後まもなく世間から孤立した自閉的な感情、寂寥感に襲われ自分でも戸惑います。しかし、藩の中核にいる旧友が、現役世代が直接対応できないような難しい案件や事件の解決を相談し始めるとき、清左衛門に新たな心境の変化が芽生え、現役時代とは違った価値観を携えて難題を解決していくのでした。

村井理事長が、思いもよらず2度目の副理事長に指名してくださったのは、国内外の学会の役職や学術雑誌の編集委員を次々に退き始めた私が、清左衛門のように社会から孤立し孤独感に苛まれぬように、お役目を与えてくださったのかもしれません。私以外は現役バリバリの執行部とは少し異なる視点から、理事長を支え学会に貢献させていただけましたら幸いです。